

# 図書館の検索システムの現状と展望

——国文学研究者からの提案——

岩 下 紀 之

## 第 一 節

今年の四月に、ふとしたことから本学の図書館では、最近二年間の購入書については閲覧者用の書名カードを作成していないことに気付いた。というのは本学の図書館の規模であると、目指す書物がどのあたりにあるのかは大体記憶しており、いちいちカードを引いたりする必要がないため、国文学科の教員はだれもカードの作成をやめたことに気付かなかったのである。検索のためのコンピュータを備えつけたので、今後はカードを使う必要がないとの見解からであろうかと推察するのであるが、しかし現在の検索システムが充分なはたらきを示しているかどうか、利用者のがわからの声を一度きいていただきたいものである。筆者の実験ではまだ不十分なところが多く、この段階でカードを廃止するのは時期尚早の感を禁じえないのである。また、あまりに使いにくいシステムであることを、説明したのであるが、実務者以外の図書館の関係者や図書館情報学科の教員には、どうも筆者の言わんとするところが伝わらないもどかしさを感じるのである。そこで、筆者の見解を述べさせていただきたい。

ここで論ずるのは、すべて和書の検索についてであり、その他の雑誌や洋書に関することは筆者の手にあまることなので、対象外とする。また図書館業務のためのソフトウェアが、(1)図書受け入れ、(2)雑誌受け入れ等々の、あるいは言語処理等々のプログラムからなっていることを、一応は承知しているが、それらについて意見を述べる能力はない。それは各方面の実務者が、改善案を提出されればよいと考える。

システムの作成にあたられる方々はどうやら思い込みがあるらしい。図書館

情報学科主任の御発言をここに引用してみよう。「図書館の検索が機械化されるのは世界の趨勢である。またカードは場所をとり、検索の能力がきわめて劣っている。」こういう発言をしたあとは、あたかも勝利のうちに議論を終えたとしてもお考えなのか、一切の判断を停止され、以後の議論はうけつけない。これはいわゆる *Deus ex machina* とでも言うべきものである。けれども、世界の趨勢、カード検索の能力についての評価を検討することなしには、到底ひきさがることはいかならないのである。

私は昔見た「エクソシスト」なる映画を思い出す。悪魔のついた少女をカトリックの僧侶が悪魔ばらいをして助ける物語である。アメリカでは随分はやった映画であって、観客が恐怖のあまり、失神したということであった。けれども日本ではどうであったろうか。悪魔がついた時の少女が、口から蛙を吐きだしたり、首が360°回転したりするのが、アメリカでは恐ろしいことという約束になっているらしいのだが、我国ではただきたならしいだけに見えたり、滑稽に見えたりするのであって、恐怖という感情も、その文化ごとの約束ごとだということがよくわかるのである。逆にいえば、なまぐさい風が吹いてきたり、妙な太鼓がとどろいたりすると、歌舞伎を見る日本人は背筋が寒くなるのであるが、それをよその国に持っていっても同じような効果があげられるかどうかは予測しがたいのである。

学科主任の御意見はその専門分野の方々には当然のことかもしれないが、我々国文学の研究者には何の説得力も持たない。耳なし芳一に現れた怨霊に、カトリックの僧侶が聖水をふりかけたとしても、どうもききめがないのではなかろうか。単にそのふるまいが滑稽な様子に見えるだけではないだろうか。キリシタン、バテレンの妖術というので、腹をかかえて笑われるのが関の山というものである。

問題は「世界の趨勢」なるものに、アルファベット以外の文字体系をもつ国々が、考慮されているかどうかである。日本の文献についてどの程度の検索が可能になっているのかを確かめることなしに、そのままにはうけとりかねる考えと言わねばならない。またそう言うにしても、まずはコンピュータ関係の技術者に対して言われるべきことであって、そのあとで一般の利用者がシステムを利用することになるはずである。

なお本稿につき、筆者が座右において参照したのは、次の二文献である。

1. 多言語・多文字資料利用のための図書館自動化システム—問題と解決  
本書は、国際図書館連盟 (IFLA) なる組織の、1986年8月の東京大会の、

プレコンファレンス・セミナーにおける報告を集めた論文集である。本稿ではこれを「論文集」として引用する。

2. 本学の「論集」第14号所収の、本学図書館長の論文「大学図書館の改善」。これを「館長論文」として引用する。

1の論文集を通読した感じでは、図書館の機械化は、まず館員のためのものであり、さらには書誌データを国際的に交換することに、主なる努力がはらわれているようである。閲覧者に対するカード目録の廃止への方向性は、かならずしも読み取ることができない。例えば John W. Haeger は、RLIN システムにおける印刷カードの位置付けについてこう言う。「RLG のスタッフ、評議会、少なくとも東アジアプログラム委員会の幾人かは、RLIN は東アジア図書館において一般閲覧者用オンライン目録として利用され、カード目録の必要性をなくすものだと信じられていた。とはいえ、このような RLIN の利用法は、一般の調査研究図書館では考えられないことであった。なぜならシステムをロードし、端末を操作しなければならないからであり、一般に利用者の少ない米国の東アジア図書館に対して強制するわけにはいかないからである。5 年たってスタンフォードのフーパー研究所だけが、実際にカード目録を閉じたにすぎない。」機械化の進んだアメリカにおいてさえ、カード目録の有用性は明らかであり、学科主任の御見解は、「東アジアプログラム委員会の幾人」かの意見と一致している。

また論文集の全体にわたり、ローマ字以外の諸文字について、コンピュータがいかに努力を重ねているかが論じられているのであって、西洋文明の母体なるギリシャ文字、世界の一方の強国の文字であるところのキリル文字にしてすら、この努力の対象になっている。言いかえれば、まだ自由に取り扱えるところに達していない。アラビア語、ヘブライ語等、右から左に書く文字の処理も、苦心が重ねられていること。インドのデーヴァナーガリー文字は、全く手がついていないこと、タイやチベットの文字は、それぞれ研究が進められていること、等々である。まだ書誌データを云々できるようなところには達していない。これがどうやら世界の趨勢なのである。

「カード」の検索能力は、機械の検索能力と比較検討してみた上で、おたがいの能力が分かるのであるから、それについては後段で論じてみよう。

「場所をとる」ということについては、どうも理解に苦しむ次第であって、本学の図書館では、さしたる問題とは思えない。館長論文によれば淑徳大学図書館の蔵書数は、昭和64年現在で43,656冊であり、将来についても20万冊が想

定されているにすぎない。一方書庫には30万冊程度の収蔵能力がある。現時点で25万冊の余力があり、将来も10万冊分の空間がある。場所が狭いなどとは少しも心配いらぬことなのである。

本質的な問題は、機械による検索がカードによるそれよりも優れていることを、多くの利用者が納得し、カードよりもコンピュータのほうを利用するようになるかどうかであって、一方的にカード目録を廃止するなどということがあってはならない。コンピュータが大変な力を持っていることは、自明であってあえて論ずるまでもない。しかし、その用途によってはそろばんのほうがまさっていることはありうる。人工衛星の軌道を計算するのに、そろばんが適さないことは明らかである。だからといって日常的な買い物にコンピュータが適するとは言えない。新幹線が自転車より速いのも言うまでもない。けれども両者ともにそれぞれ役割を持つことも明らかなのである。しかし、意外にも、コンピュータは図書館の業務については、得意ではないらしい。論文集の中で、Jack Cain はこういつている。「図書館員とコンピュータ専門家が図書館業務の機械化に取り組んで、二十年の歳月が経過している。今や、この種の機械化が最も難しいものの一つであるというのが学識者の共通の認識となっている。」としていくつかの理由をあげ、さらに「大部分のコンピュータ専門家からは、多文字処理の分野の仕事をしていると言うと、幸運を祈る！ というきまり文句が即座にかえってくる。」どうやら機械化へむけての手放しの楽観論は、専門家のなかには存在しないらしい。学識者の共通の認識をよく研究してもらいたいものである。

## 第 二 節

今年の四月に、必要があって、初めて本学の検索システムを使用してみた。その時の結果と感想を記してみたい。大体我々は、自分の専門の分野については、とくにカードも検索システムも必要を感じない。どこに何があるかはほぼ承知しているからである。しかしそれを離れた分野となると、どうしてもなんらかの補助手段が必要になる。学生の利用者を考慮にいれるまでもなく、検索しやすい手段を備えておくことは図書館の当然の義務である。

さてそのときに調べた本は3冊であったが、ここではそのうちの2冊を記しておこう。

### 1. サミュエル・ジョンソン伝

## 2. 滝沢馬琴 吾仏之記

私にはコンピュータの入力などというものは困難だったので、館員に代行していただいたのである。さて書名を入力してみると、「サミュエル」のユの字が大きい小さいかによって検索ができないということであった。そのような場合著者名によっても検索ができるが、その時は原綴りによって検索するとのことで、著者名ボズウェルの綴りを入力して検索した。次の滝沢馬琴の本では、これも書名をいろいろと試みたけれども結局発見できず、著者名によって、検索したのである。この時も滝沢という文字と旧字体の瀧澤という文字の違いによって検索できず、バキンをキーワードとして検索したのであった。

以上の検索の成績は、結局目指す本が検索できたという点では成功したとも言えようが、専門の館員がこれほど苦心してようやく目的をはたしているという点で、使いやすい検索システムとは言いがたいものと考ええる。この段階で、関係する諸方面にいろいろな接触をもってみたのであるが、機械の使いにくさのほかに、さまざまな問題点を指摘できるように思った。第一点としてのハードの使いにくさ、次に、検索システム全体に対する責任者の不在を指摘しなければならない。我々のさまざまな質問について、ある人はそれはハードのことであるからわたしには分からないと言い、またある人は、それはデータベースのことだから分からないと言う。結局のところシステム全部に対して責任を持ち、改善案を教示できる人が存在しないのである。これでは現在のシステムがより使いやすいものに成長してゆくことなど期待できないではないか。また第一節で引いた学科主任の御発言もこのあたりのやりとりから承ったものである。

この検索システムが過剰な期待をかけられていることにかんがみて、利用者、閲覧者から見た現状についての批判的な論稿をここに記してみたのである。四月から半年自分の研究でワープロ、パソコン等を少しさわってみた。すると、四月の図書館での経験は、かならずしも機械の取り扱いかたの拙さによるのではなく、システムそのものの不備によるところの多いことがわかった。カード等の検索に比べて、機械による検索の優れていることは一応明らかなことである。カードによっては設けた項目のうち、原則として常に一つの項目しか検索することができない。コンピュータでは、全ての項目について同時に検索できる。図書カードを例に取れば、書名、著者名、出版社、出版年等を項目として立てたとすると、カードでは先頭においた項目、たとえば書名での検索ができるだけであって、著者名での検索を試みるとすれば、同じカードをもう一枚作

らなければならないし、もしそうしたとしても、項目の最初の文字によっての検索ができるのみであって、途中の文字による検索は不可能である。夏目漱石と登録してあるカードでは、漱石という文字からでは、どんなにがんばっても、「それから」を見つけることはできないのである。

このように見るだけでも、コンピュータによる検索の可能性、スピード等、カードによる従来の検索に比べて優位性は明らかであろう。ところが実際にこうした可能性を生かすためには、きわめて慎重な検討が必要になってくるのである。本学のシステムには水ももらさぬ周到な予見性などは少しも見当らない。一つのシステムを働かせるには、コンピュータそのもの、すなわちハードと、必要なデータをあらかじめ入力したところのデータベース、さらにはそれらを有効に利用するためのソフトウェアが有機的に働かなければならない。これらの相乗効果によって、そのシステムのもつ可能性が開けてくるのである。しかしながら逆に言うと、どこかに弱い部分があると、その力はあまり発揮されない。と言うより全く発揮されないのである。これから論ずることがらは、それぞれこの三者に関わってくるのであるから、改善策を考える場合には、それぞれについて詳しい知識をもち、かつ権限を付与された人材がなければ対応することはできないのである。

具体的に一つ一つの検討の感想を記しておこう。

キーボードの与える抵抗感は、専門家にはどう言っても理解していただけない。このシステムにおいても、ソフトとの関わりで、ある項目は漢字変換をしなければならず、またある項目では、半角のカタカナ、さらには原綴りの必要とされる項目では、アルファベットで入力しなければならない。それぞれの設定を自由に変更することは、一般の利用者にはかなり困難なことである。私自身この原稿をワープロで作成しているのであるが、図書館の機種とは異なるものを使っているので、今でも検索にあたって、館員の助けを求めているような次第である。マニュアルを見ればすむことだと関係者は言う。しかしマニュアルを読んですぐにそれが使いこなせる人は、一般の閲覧者にはいないということを、まず念頭においていただきたいものである。それよりもっと重要なことは、この機種の日本語の入力の性能そのものである。現在のワープロやパソコン登載のMS-DOSの日本語処理機能には、単語の登録が可能になっている。このようなことを関係者が知らないはずはない。しかるにこのシステムの機種には登録機能が備わっていないのである。するとどうなるのか。明治以後の作家を考えてみて、もっとも著名な人々を例にしてみよう。夏目漱石、森鷗外、

永井荷風という人々の名が登載されていない。そのため利用者は漱石、鴎外、荷風、というそれぞれの文字を、一つ一つの漢字として入力しなければならない。図書館を利用する人々がもっとも多く読むであろう作家達について、すべての利用者がこの作業を繰り返し、しかもそれらの人名がまったく登録されないのである。同じように任意の人名で試してみたところによると、柿本人麻呂、大伴家持、在原業平などが、登載されていない。紫式部とすぐ入力できたのを報告できることは、私にとっても喜びとするところである。書名については、もう少しましであったので、これもここに記しておこう。日本書紀、万葉集、源氏物語、枕草子などを簡単に入力することができた。しかし、同じように有名と思われる、古事記、平家物語、古今集は、残念ながら登録されていなかった。この機種についての専門家の評価がいかなるものであるのかは、まったく知らないが、図書館と言う特殊な用途のための用意が一切なく、また日本語の処理能力については、普通のワープロ、パソコン以下の能力しか持たないものである。このような事情は、ソフトの能力範囲を大いに狭めるものである。すなわち、書名、著者名による検索の可能性を、制約しているからである。

本学の採用している ILIS というソフトについても、同じように、使い心地がよくない。こちらのほうは、データベースのできばえに関連があり、利用者には、どこまでがソフトの守備範囲で、どこからがデータベースの責任なのかがよく分からない。ただ利用者としては検索を試みての感想を申し述べるまでである。

### 第 三 節

検索のためのソフト ILIS について、なぜ使用しにくいかを述べてみよう。第一に各項目の入力について、書名は漢字変換モードで、書名キーワードは半角かたかなのモードで、もし翻訳書であれば、著者名をアルファベットでというように、キーボードを各項目ごとに異なる設定に調整しなければならないことである。

また著者名の項目では、姓名のあいだに「,」が必要で、この「,」を入力するためにローマ字のモードに変えなければならないというおまけまでついている。またある場合には、入力キーを押し、別の時には検索キーを押すということも、普通の利用者をおおいにとまどわせるものである。こうしたことは、もろにキーボードの操作の巧拙が影響し、閲覧者にはまったく迷惑至極のことで

ある。閲覧者は本を読むための時間は惜しいと思わない。しかし不慣れなキーボードと格闘するようなひまはないのである。この点での改良を切に要望するものである。

しかし本質的なことは、むしろ次の点であろう。すなわち書名、著者名のそれぞれのキーワードの項目は、意味の切れ目ごとにスペースをおいて入力しなければならないというのである。しかしながら意味の切れ目とはいったい何であるか。「源氏物語」は、どこに切れ目があるのか。ゲンジ モノガタリとも切れるし、それとも切れ目なしとも言える。さらには各漢字ごとに切れるとも考えられる。大学生のレベルで考えれば一つ一つのひらがなに分けることも、立派な見識であるし、音声学を学んでいる学生は、母音と子音に分けることだって考えるかもしれない。要するにこのようなことは前もってソフトが考えておくべきことなのである。今の例が極論にすぎるといえるならば、さきにあげた「吾仏之記」を例にしてもよい。これがアガ ホトケ ノ キという区切りかたで入力されている事実を、ここに記しておこう。このような区切りかたを、予想するなどというのは、まさに神業と言うべきである。

いま使われているパソコンのレベルからみて、このようなスペースをおく入力そのものが、趨勢に遅れていると言うべきではなかろうか。Basic の search コマンドにしても、dBASE のようなパソコンソフトにしても、一行の文字列から任意の文字列を探し出すことなど、まったくわけもないことである。アガ ホトケノキとデータベースに登録しておけば、その一部にあたる文字列は、パソコンのレベルですら、簡単に検索できる。問題は十万単位のデータを処理するとき、速度ということになるわけであって、それを速やかに処理するのが、こうした情報産業の腕の見せ所ではないか。これを要するに、現状の検索システムは、市販のパソコンソフトの使いよさにも及ばないのである。

単語に区切るということは、なるほどキーワードの検索の速度を能率的なものにするためであるかもしれない。しかし著者名の入力法を見ると、これはどうやら洋書の著者索引をそのまま引き写したものと見える。たしかに洋書の著者索引は、姓を前にして、ファーストネームを後に記し、そのあいだにカンマを打っている。日本ではもともと姓をさきに、名をあとに書く習慣であるから、このようなカンマを入れる必要はなかったのである。こうした書式を考えると自体、英語圏でできたやりかたの、無自覚な引き写しと言うべきである。キーワードの項目の分かち書きも、ヨーロッパのように、元来分かち書きする習慣の言語にあっては、自然な、だれもが一致しうる区切りかたが定まってい



よう。しかしこれを安易に、日本語に適用するのは無理なことである。まして、このごろのように、パソコン程度の金額の機器によってでさえ、かなりの能率が実現されていることにかんがみると、本学の検索システムは、世界の趨勢に、はなはだしく遅れているように見える。

また著者名の項目は、原綴りによって検索するという方式は、一般の利用者には、はなはだ困難である。これは翻訳書のことについて論じているのであるが、いったい任意の外国の人名について、われわれ利用者が原綴りをすらすらと書けるとでも考えているのだろうか。失礼ながらこういうシステムの開発者は、たとえばデカルトとか、ドラクロアなどという人の原綴りを、即座に綴ることができるのであろうか。

大体我々がもっとも必要とする外国の文献は、中国のものであり、ついではインドのものくらいである。インドの人名の原綴りなどというものを綴れる人が、一般の閲覧者にいるものかどうか、よくお考えいただきたいものである。このようなことを言うと、それはそばに人名辞書を備え付ければよい、などという返事がかえってくる。これもものを知らないというものだ。外国の人名で辞書にないものなどいくらでもある。また最近の人名などが辞書におさまっているわけがないではないか。

さて、関係者はみな原綴りといい、マニュアルにも原綴りと記載してあるが、実はそうでない。原綴りではなく英語綴りにしてあるにすぎないのである。したがって、ドストエフスキーを調べてみればローマ字で綴ってあるのだし、プラトンをみれば Plato, アリストテレスをみれば, Aristotle と英語綴りが出てくるにすぎない。世界各国語をローマ字の英語綴りにしただけのことである。

このように見てゆくと、機械による検索には、実に多くのマニュアルが必要なのが、判明してくる。まずキーボードの使い方についてのもの。つぎに ILIS というソフトのもの。最後に外国人の人名辞書。こういう多数の補助のもとに、はじめて機械による検索が可能となるのであり、逆にマニュアルがなければ、全く利用不可能となるのである。

## 第 四 節

さきにみた「サミュエル・ジョンソン伝」と「吾仏之記」とで、どのような検索の成績になったかを、ここに示しておこう。今度は本の所在も承知しており、このシステムの使い方にも一応は慣れた上のことである。

書名キーワードの項目を使用し、サミュエルと「ユ」を小さく打って、入力してみると、「サミュエル・ジョンソン伝」、「サミュエル・ピープスの日記」が画面に現われる。これで検索が成功したように見えるのだが、実はそうではない。何となれば、サミュエルと「ユ」を大きく打って入力すると、「サミュエル・ベケット」の関係書が現われるのである。これは最悪に近い結果である。「ユ」を大きく入力した利用者と、小さく入力した利用者と、同じサミュエルなる人名について、この図書館の蔵書を一部しか知ることができないのである。聞くとところによれば昭和61年度以前の入力分については、「ユ」を大きくして検索する方式、それ以後は、学術情報センターの書誌データを利用して、ユを小さくする方式になっている。このような不統一は、館長論文所収マニュアルのどこにも記されておらず、利用者はとまどうばかりである。またこのとき入力にあたったのは、外部の業者であって、データベースのできればは芳しくないとのことである。だいたい入力のもとになるデータが、従来の蔵書カードのままで、ソフトとの照合が考慮されていないと言うのであるから、この時期の蔵書については、カードによる検索以上の精度を実現するのは不可能である。第一、メニュー画面にあらわれる書名の項目が使用できず、正しい書名を入力しても該当書を発見できないのである。これは信じられないような水準であって、到底実用にできるしろものでなく、しかもマニュアルにはこのこともまた記されていない。

日本語の処理については、こういう拗音の処理などは、前もってソフトが充分な機能を設計しておくべきことであり、「ユ」が大きかろうが小さかろうが、すべてのサミュエルを検索できるようになっていなければおかしいのである。まったく同じことが「滝沢」についても言える。旧字体だろうが新字体だろうが、両者をともに処理できるようにしておくのは当然ではないか。さらに古典の中に現われる人名、書名は、さまざまな異称を持っていることも常識である。「土佐日記」と「土左日記」は、まったく同じ書物を意味する。しかしコンピュータには、両者が別のものを意味し、これを同一のものと識別させるためには、周到なソフトウェアを準備しなければならず、それを欠いたシステムに何の意味があろうか。一方では「伊勢物語」と「好色伊勢物語」とが、異なった時代の、異なったジャンルの作品であること。このような相互の識別について、なんらの感覚を持たずにこのシステムを発足させたことは、将来の禍根となる恐れが大きい。

複数の、かなり多数の異称を、同一の項目におさめることは、すでに可能に

なっている。私は機械についてははなはだ暗いものではあるが、「聖書」のコンコードانسが、機械によって作られているのを知っている。ギリシャ語のように、動詞の活用が豊富な言語において、多くの活用形を、ひとつの動詞の項におさめることは、大変な苦勞であろう。機械はものを考えるわけではなく、一つ一つの活用形をソフトウェアが処理して動詞の原形に結びつけるはずである。活用形の数はいくつや二百にはとどまらないであろう。人名、書名の異称は、それよりもっと少ないに違いないのであるから、要するにやるかやらないかという決断にすべてがかかっている。

## 第五節

前節に述べた最悪に近いという評価は、まぎれもない最悪の結果を見ているからこそくだしたものである。およそ蔵書として所有している書物を、システムが「ない」と応答することこそ、最悪と言うべきであるが、まさにそのことがおこっているのである。すなわち「吾仏之記」は、本学図書館に存在するにもかかわらず、利用者はあきらめて立ち去るという図式になっている。コンピュータの応答は、その本が図書館にないとはいっていないなどという弁解は詭弁にすぎない。利用者に対するサービスが忘れ去られていると言わざるをえない。本学には「近世文芸叢刊」所収本が蔵せられているのである。

次に国文学の学生がどの程度の書物を利用しているかを紹介し、それらについてシステムがどのように反応したかを報告しておきたい。これらの専門書について、図書館関係者は承知しているはずもないのに、議論がこのような具体的な箇所にはさしかかると、例の *Deus ex machina* の登場となるのである。国文学研究者とすると、そのような反応が不思議でならない。現代のように各分野の専門化が著しい時代では、他の専攻に関しては何も知らないという前提からの調査研究をはじめるのが当然ではないか。ここに述べる諸文献は、中世文学の研究者にとって常識のものであり、それらを見つけるための補助手段は必要ない。もし和歌を専攻する研究者であるならば、書斎の本棚からそれらを取ってくるだけのことである。しかしながら全く別の分野の研究者、たとえば情報学などを専攻している人には、はじめて聞く書名、人名があることと考える。しかし国文学の専攻者としても同じことで、中世の研究者が万葉集や芭蕉の基本的研究書を問われても、知るはずもないのであって、専門家の助けを求めればすむことなのである。問題は、この専門家の役割を、検索システムが果たす

ことができるか否かというところにある。

取り上げたテキストは、徒然草の江戸時代の注釈である。3年生の演習では影印本を用いている。

又漢書の内に、興芳七尺盧橘纔左の袖に伝ふといふ語あるより、昔の人の袖の香ぞするとはよむなりと、顕照法師の注に見へしを、定家朝臣は、これを用ひ給わぬと見へて、蜜勘には香何の袖にも侍りなんとかかせ給ふ。

このような写本を読んだり、漢文の引用の出典を搜したりする能力が、コンピュータに備わる時がいつか来ることであろうが、今は不可能なことである。今可能なことは、書名、人名の検索程度のことであるが、それがどの程度の成績をあげうることであろうか。ここで試してみよう。

さて、文中に、漢書、蜜勘という二書名と、顕照、定家という二人の人名が現われている。こういう箇所が当たった学生は、一定の期限内に、これらの固有名詞について、調査してくることになるのであるから、当然図書館を頼るのであろうし、教員のほうでも、前もって、蔵書を整備しておくことになる。

まず漢書についての検索をこのようにやってみた。

1. カンジョとヨを大きく入力すると、「漢書人名索引」、中華書局版の「漢書」全巻、東洋文庫「漢書 郊祀志」、「漢書 五行志」が画面に現われる。
2. カンジョとヨを小さく入力すると、東洋文庫「漢書 食貨・地理・溝洫志」、中国詩文選「漢書」が現われる。

この結果はやはり不満足なものである。拗音の処理の不手際は前に見たとおりであるが、その上、本学に蔵する和刻本正史、平凡社の中国古典文学大系所収の「漢書 後漢書 三国志列伝」を発見することができないからである。

蜜勘は即座に発見することができた。書名キーワードの項目でミッカンと入力すると画面に現われたのであった。普通この書名は、顕註密勘と書くのだが、将来はこのような文字の違いにも対応できるシステムになってほしいものである。

人名については惨憺たる結果となった。顕照、定家ともに「該当する書誌が見つかりません。」ということとなった。

顕照は字の誤りであるから、顕昭と正しく綴って入力したのであるが、駄目であった。定家も同じことであった。両者ともに著者名と著者名キーワードの項目両方を使って検索できないのである。しかしながら両者の著書も本学に当然蔵せられているのであるから、これも最悪の結果と言うべきであろう。顕昭

の著書といえば「袖中抄」が歌学大系におさめられ、「古今集註」が続々群書類従におさめられており、当然本学の蔵書のなかにある。定家の著書といえば、これが開学以来一冊もないなどということはありえない。「新古今集」や「明月記」などを蔵書に含まない図書館など到底考えられないのである。第一「顕註密勘」が図書館にあることを、今見たばかりである。この本の受け入れは、本年度のことであり、したがって学術情報センターの書誌データによっているはずである。とすればこの書誌データは、作者名から該当書を探り出すためにはあまり役に立たないという恐れがある。学術情報センターに盲目的な信頼をよせてもよいものかどうか検討が必要となろう。

国文学の研究者が従来やってきたところの、また学生にも教えてきた検索法は、「国書総目録」の利用である。書名から検索するのは、五十音順に見て行くだけのことであって、何の技術もいらないことである。作者にしてもやはり五十音順の作者索引をひくだけのことである。顕昭の項を見れば、著書の一覧があり、指定されたページをひもといて、歌学大系を知り、図書館のカード目録を見るということのみであった。充分に用が足りていたのである。現在のシステムには、図書館にある本がある、ない本がないと指示するという、最も基本的な信頼度において欠陥があるわけである。またシステムの不備から、歌学大系のような書物は、書名をもって検索することができず、キーワードで検索すれば、歌学のほかに、化学、科学など、大系のほかに、体系、体形などの単語を含む書物を画面で見なければならぬ。学生に対し従来のやりかたのほうが、今のシステムにまさること数等であると力説するのは、当然のことである。このように検討してみると、このシステムはあまり役に立たないという結論が自然にでてくるのである。失礼ながら、国文学の書物が多く叢書形で出版され、研究者も一つ一つのテキストを、それは古典大系本だ、それは、天理善本叢書だというように記憶していることを、システム開発者が知らず、調査もしていない結果と言わなければならない。「吾仏之記」が近世文芸叢刊に収録され、顕昭の著書が、歌学大系や続々群書類従に収録されているのが検索できないのである。従来の本学図書館のカード目録も検索能力はその程度であったのは、残念ながら認めなければならない。しかし機械化されたシステムが、この程度の能力で固定化してしまうのははなはだ問題である。

## 第 六 節

以上に述べたことによって、今の段階でこのシステムの評価、ならびに今後の改善策を考えてみよう。入力を受け持つハードが、現在のワープロ等に備わっている登録、学習機能を備えておらず、しかも図書館業務用の人名、書名を登録していない。またソフトが、日本語の特性を考慮せず、分かち書きの強制、人名の姓名間へのカンマをうつことをこれをまた強制するなど、はなはだ使いづらいこと。この条件のもとでシステムの使いがたがよいはずはない。昭和61年以前のデータが誤りの多い、できの悪いものである以上、それらがカード以上の検索能力を持つはずがない。昭和62年以後のデータについていえば、データベースそのものはある程度の精度を備えているのであるから、ハードとソフトの操作に熟練すれば、それなりに役に立つことであろう。問題は、その熟練のためにどれほどの努力が要求されるかであって、一般の閲覧者にそれを求めるのは、困難と考える。こうして、このシステムを、館内部の業務用のものとして位置付けるという結論が導きだされてくる。そのかぎりにおいて、ここに改善策を提示する必要もなくなるのである。また ILIS の設計自体も、図書館員のためのもので、閲覧者を一義的に考えたシステムとは感じられない。メニュー画面には、請求記号で検索する項目があったりする。請求記号を知っている閲覧者が、検索システムを使用するはずがないではないか。また、「and」の検索の項目がある。閲覧者が書名と著者名を両方入力して検索するなどというのも、にわかに信じがたいことである。これらは、図書館員または、情報科学学生の実習のための項目としか考えられないものである。

こうしてみると、現状のシステムは、従来のカード検索より劣った成果しかあげていない。機械の能力の長所が発揮されておらず、きわめて使いにくい。データそのものに誤りが多い。カード目録の検索では、分かち書きの問題も、拗音の処理もまったく困難がないし、一切マニュアルのようなものも必要ない。システム全体に対する責任者の不在という本学の図書館の現状の体制では、これを改善することは不可能である。したがって国文学の教育、研究にこのままの発想でシステムを考えていくなれば、あまり利用価値のないシステムにならざるをえないであろう。これが結論である。

しかしながら、すでに事態は動いており、カード目録が最近の2年間分置かれていないことはもう事実となっているのである。このような状況のもとで、

一般の利用者のために今すぐになすべきことはなにか。まず現状のシステムで、昭和61年以前の受け入れの本は、事実上検索できない。書名の項目に検索能力がないために、正しい書名を入力しても「該当する書誌は見つかりません。」というコメントが現われ、利用者はこの本はここにはないのだと思うであろう。その他前に述べたようなことがあるので、機械のそばにでも、このシステムは、最近の2年間の本にのみ使用でき、それ以前の本は、カードで検索するようにとの指示を明記すべきである。

また「該当する書誌は見つかりません。」と言うコメントも、本が本当にないのか、それとも、システムが不備なのかの区別がなく、誤解をまねきやすい。

マニュアルについていえば、館長論文所載のものは、はなばだ不十分なものである。これが図書館の端末のかたわらにも置いてあったのだが、もっとも基本的なこと、すなわち、できることと、できないこととの区別がない。たとえば書名の項目が、3年前の本では使えないというような事実を記載していない。メニューの画面にあらわれる、「and」の検索が、一部しか使えないことも記載しない。人名の項目にカンマが必要なことも、キーワードの分かち書きのやりかたも、一切記載がない。マニュアルの体をなしておらず、はたして御自分でこのシステムをお使いになったことがおありなのかを疑わしめるものである。こうしたものは、表面を糊塗することなく、率直にできることとできないことを明記して欲しい。したがって、マニュアルには、最近2年間の本を機械でも検索できます。メニュー右側の「and」の検索は一部しか使用できません。と書くべきである。また、分かち書きの具体的なやりかたも明記しておくべきである。

また検索システムがこの程度のものであるからには、カードを廃止するという計画は、はっきり見直していただきたい。マニュアルには、肝心なことは記載がないにもかかわらず、このような記述がある。「大学図書館の施設設備の充実については、図書館の増築とあわせてコンピュータを導入して、資料の整理や貸出、ならびに図書館情報学科の実習に対応するため、昨年4月から順次整備をすすめてまいりましたが、ようやく資料データの入力や、外部データとのオンライン化も整いましたので、窓口でのコンピュータ端末機による図書館資料検索（従来通りのカードによる検索もできますが、大学図書館の61年度までに受け入れた図書館資料に限って可能です。）ができるようになりました。」つまり62年度からカード目録を廃止したと言うのである。このようなことを決定する権限は、誰に属するのか。また利用者、閲覧者にたいする事前調査は、

いかなることをしたのか。一切が不明である。さきに引いた論文集で Jack Cain は言う。「このように開発課題の困難さをみれば、達成はかなり先になることは明らかである。非ローマ字言語の処理というコンピュータの観点からはきわめて特殊な分野で、図書館員とコンピュータ専門家は一つのチームとして、コンピュータ機器の取扱能力の最前線にいないといけない。」本学のシステム導入にみられるこの楽観論と、世界の研究者の趨勢との相違点は、きわめて鋭い対比をなしている。すなわち情報機器の現在の水準のままで、拙速にカード目録の廃止に踏み切ることは、将来の運命にかかわる大事となりかねない。現に現代中国の文献は、この検索システムでは、扱えないのである。

こうして館長論文は次のような一節は、もはや破綻していることが明らかになった。「図書館運営や講義に利用するためにコンピュータの導入を図ったが、業務にも実習にも次第に必要にせまられて端末機の数が増加してゆくことは明らかである。従来のカード目録による資料検索も、近い将来コンピュータ端末機に取り替えなければならないし、実習学生の増加に対応して、演習室の端末機も当初計画のように増加させねばならなくなる。」

ここには閲覧者、利用者に対して、ついに一言も言及がない。図書館長の目がこのように偏向していることが、この文章にまことによく現われている。まず閲覧者の声を聞くべきである。また大学においては、利用者である教員たちは、それぞれの分野において、普通の図書館員よりも本に関しては詳しい知識を持っているのであって、そのことを率直に認めるべきであろう。なによりも、近い将来のカード目録の廃止とは、誰の権限で、いつ行われるのか、明らかにすべきであり、またそのような計画に対し、利用者の意識調査を行わなければならないと考える。

## 第七節

以上の考察の結果、今後の図書館の検索システムに対し、提案をしておきたい。まずシステム運営に関する責任者をおくことである。このような体制なしにシステムを発足させたこと自体不可解であるが、すぐにも手配をしなければならない。もしこの体制がとれないのであるならば、システムの将来は、ほとんど決定的に暗いものである。またそのような責任を担う人は、本に対しての経験を持ってほしいものである。図書館員になによりも必要なのは、書物に対する愛情であり、その立場から、閲覧者の困惑に応えることができるのである。



またコンピュータについての専門家であるのは当然として、日本語の処理に興味と関心をもつ人でないと、一つ一つの事件に対応できないであろう。また、閲覧者からの声に対し、誠意ある回答をなすべきである。この問題はできる。あるいは、できない。もしできるとすれば、すぐにできるのか、ある程度時間をかけてからなら、できるのか、こういう率直な応答をしてほしいものである。今回の調査では、実務にあたる館員の方々からは、つねに誠意ある対応を受けたが、それより上の部分にはなはだ問題が多いことに気がついた。というより、責任ある立場の人間がいらないのに気がついた。問題解決の能力を持ちようがないのである。

システムそのものについては、端末機現在の普通のワープロ程度に高めなければ、どうしようもないであろう。また図書館向けの基本的人名、書名は、あらかじめ登録しておかねば、どうしようもない。

ソフトについても、日本語の処理について、考慮されたものでなければ、どうにも動くはずがない。拗音、促音、清濁の処理、また、人名、書名の異称の処理を工夫すべきである。これらについては、漢字の処理と同じように、端末に学習機能を持たせなければならないと考える。さまざまな図書館は、それぞれ異なる利用者がある。大学と一般の図書館では、利用される本が非常に異なるのであるから、ソフトがあらかじめ全部の図書館むけの人名、書名を登録することは困難で、各図書館の事情にあわせた書名、人名を各図書館の運用の中から利用可能にして行くべきであろう。

キーワード項目の分かち書きや、人名項目のカンマなどの、英語圏の習慣のあてはめは、日本語処理になじまず、廃止しなければならない。翻訳書の原作者についても、原綴りと称する英語綴りの強制を廃止すべきである。ロシア人について、ギリシャ人について、我々が英語綴りを強制されるいわれはないからである。また原綴りを英語文献のみに限っても、これが誤りの少ない、優れたやりかただと考えるのは、あまりに素朴な発想である。綴りの一定したのは、近代の印刷術の発達によるものであって、3百年程遡るだけでも、いかに色々な綴りがあったか分かるはずである。中世に遡るならば、その程度はもっとずっとひどくなるはずである。英語以外の言語に至っては、たとえばハムラビ法典などはどうするのか。古代エジプトのインホテプの予言などというものはどう扱うのか。原綴りと称する方式そのものが、非常に多くの時代、民族にかかわる書物を扱うことになる、日本の図書館には、適当でないのである。

解決策はこのようになろう。書名の項目、人名の項目は、それぞれ該当書の

漢字仮名交りの表記を採用する。検索にあたっては、そのうちの文字列で引けるようにする。今ある、キーワード項目は、書名、人名のよみの項目とし、これもそのうちの文字列で検索するようにする。こうすれば翻訳書の著者名も、もし原綴りでの検索を可能にしたいのなら、データベースに日本語表記、英語表記の両者を併記しておくだけで、検索に支障がない。もとより、表記の面でのさまざまな隘路は、ソフト構築の段階で解決しておくものとする。筆者には、このような改善がどの程度困難なのか、または全然困難でないのか分からない。データベースそのものを改変しなければならないとすれば、不可能であろうし、ソフトに手を入れるだけで充分であるならば、可能であろう。ただこのように改善したときには、カード目録の能力を上回るとは確実であって、さらに叢書類のデータを丁寧に整備するならば、学生の演習に際してもかなりの利用価値を生ずるであろう。何となれば、漢字で記された書名のよみは、きわめて難しいことである。人名についても同じことであって、どこまでが姓で、どこからが名であるのか、分からないなどということが多いのである。確実に読める部分を入力するだけで、検索が可能になるとすれば、これはすばらしいことである。いずれにしても現状の著者名項目はこれはどうしようもない。アルファベットの入力、カンマというのは設定を変えずにできるが、漢字での入力のときは、設定を変えなければならない。日本人は姓名のあいだにカンマを入れるが、中国人は、続けて入れる。キーワードになると、中国人の姓名のあいだにスペースを入れる。なんと面倒で使いにくくてきていることだろう。

このような改善策は、各方面に慎重な検討を依頼し、十分な討議をへてから実行に移すべきであり、かつ試用期間をおいてさらに点検すべきである。昭和62年度以後受け入れ分の図書については、閲覧者用カード目録を早急に作らなければならないと考える。現在のシステムは、あたかも閲覧者に対する目隠しのごときものになっているからである。ILISにはカード作成のプログラムがあるそうなので、機械的に五十音順に打ち出して、書名目録、著者名目録を作ればよいと思う。従来の本学のカード目録は、ローマ字転写のアルファベット順になっていたが、ローマ字に転写する段階でさまざまな問題が生ずるのであるから、仮名の五十音順に変えてよいと考える。その当時は、タイプとしては英文タイプしか利用できなかったのだが、今やワープロをはじめとして、日本語処理が楽にできるようになっている。国会図書館も最近の受け入れ分の図書については、ローマ字を廃止している。ローマ字転写には、いくつも方式があり、国会図書館の閲覧者のために、ローマ字の一覧表が掲げてあったものであ

る。五十音順にすれば、このような無駄なものはいらなくなるのである。また本学の従来のカードでは、書名中にあらわれた西洋人名は、たとえば Torusutoi と綴られる。これは図書館のカードボックス以外には、世界のどこにも生存できない、亡霊のごとき綴りであって、もはやお引き取りを願ってもよいであろう。

現在入力ずみのデータについては、61年度以前のものが、使いものにならないことをすでに証明した。この訂正は、本図書館の現在の人員では、どうにもやりとげられないものに思われる。カウンターの人員すら確保できないような態勢であるので、ここでは、一応このままの状態で凍結したらどうかと考える。閲覧者には、どのみちこの時期の蔵書は、カードで検索すればすむことである。情報科学生の実習には、この時期のシステムも、当初の設計が後の出来上りにとどの程度悪影響をおよぼすかを理解させる意味で、教材としての価値がある。

なお、カード目録には、図書館側は、目の敵というような感情を持っているように見受けるのだが、これは、作成・保守管理にはなはだ人手を要する所に問題があろう。しかし使いやすい検索方法としての有効性にかんがみて、どうか努力をはらっていただきたいものである。作成には、コンピュータを利用できるように、この点負担は軽くなっていると思う。また、館長からは、冊子目録の計画をうけたまわったことがある。この場合、一度作れば保守管理の手間はなくなるのでそれなりに結構なことである。現在入力済みのデータに徹底的な改善を加えた上で、機械的に印刷できるのなら、期待して待つべきものがある。しかし冊子目録は、本質的にすでに蔵書の増加の終わった図書館にむいた媒体であって、本学のような図書館では、ある年度で区切って作成されねばならない。たとえば、61年度で区切って冊子目録を作るとして、それ以後の蔵書については、やはりカード目録が必要となるであろう。ただその場合、冊子目録の完成の分については、カードを破棄することが可能となるので、保守管理がやや楽になると思われる。国会図書館に閲覧にゆくと、明治大正の本は、冊子目録で、戦前分は、帝国図書館時代のカードで、戦後の本は、ローマ字のカードでというように、そのカードボックスなり、冊子目録の置き場なりに無意識の内に足がむいていたものである。またカードボックスが場所をとるといっても、国会図書館の開館を待っている閲覧者は、毎日数百人におよび、開館と同時に一勢にカードボックスにとりつくのである。この程度の人数をカードはさばくことができるのである。コンピュータの端末にはこうしたことは倒底できず、一つ一つの端末には、ちょうど雨の日の公衆電話の前のような行列ができ

るに違いない。現に国会図書館は、館員は機械を取り扱っているようだが、閲覧者にはカード目録によって検索させている。機械とカードの、あるいは、冊子体の目録は、それぞれが排除しあうものではなく、並行して、閲覧者の用途に応じて提供されればよいものと思うのである。

以上さまざまなことを述べたが、すべてはよりよい図書館を構築するために、一閲覧者としての意見を述べたのである。取材に応じてくださった館員諸氏に深く感謝する。